

①訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして活かせるか。

研修を通じて活かせることはたくさん得ることができたが、ここでは 3 つの点を挙げる。

1 つ目「広報」。自分たちがどのような団体なのか、ミッション、運営組織、活動内容、会員数、助成金先等の情報を外に発信する作業を通じて、自分たちの組織の再確認ができる。広報により、会員（仲間）を増やすことができる。数が多くなれば、組織の規模も拡大でき、社会的な影響力を持つことが可能となる。また、会費収入が増えれば、そのお金は団体の自主財源として利用できる。NABU では会員の 10% がアクティブ会員で、残りの 90% がパッシブ会員であった。アクティブ会員の活用と、パッシブ会員をどんどん増やせるような、そんな広報のためには、心に響く内容が重要である。今回の訪問先でたくさんのちらしを手に入れることができた。入会案内、イベントのちらし、プロジェクトのちらし、ポスター等から多くのヒントが読み取れる。ホームページや facebook などとともに、これらのような紙媒体の「広報」をさらに活かせる。

2 つ目「ファンドレイジング」。組織を持続させ、継続して活動を展開していくためには、資金調達が不可欠である。では、どのようにしてお金を集めたらいいのか。まず、うそのない透明性のある団体であることが条件である。また、**Strategy**（戦略；頭を使う）と **Operation**（行動；からだをつかう）の視点を持ち、寄付をしていただける方と、コンタクトをとり、コミュニケーションで自分たちのことを知ってもらい、寄付が何のために必要なのかを訴え、寄付がしたくなるように、相手の感情に訴えることが重要である。ファンドレイジングアカデミーの講師から学んだ、信頼関係を作り感情に訴えていく、戦略的な行動をとることで、自分の団体の資金調達にすぐに活かすことができる。一方で、資金調達はお金だけを意味するのではない。ボランティアの労働力、物品での支援など、お金の換算できるもの、あるいは換算できないものでも、組織にとって大切な資金と言える。こうした視点も活かすことができる。

3 つ目は「人材育成」。広報もファンドレイジングも、組織の様々なことを相手に伝えることであり、それを担うのは人である。また、組織を動かし、活動をするのも人である。人をいかに育むか。好きだからできるというマインド。同じマインドを持った仲間を増やすし、マインドがある組織づくりをする。マ

インドが伝われば、地域とのつながりも増す。マインド重視を人材育成に活かしたい。今回 NABU の地域ボランティア養成のマニュアルを頂くことができた。実践を通じた育成を大事にしながら、理論的な学習も組み立てられており、これを日本でのボランティア育成に活かしたい。また、FOJ の環境ボランティア養成制度も、仕組みとして今後の人材育成に活かせる。

その他、森のようちえんや自然保護センターでの具体的な取り組みなどが挙げられるが、リーダーとして日本の組織で活かせる本質的な部分を学び取るように心がけた。

②研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

支援には幾つかの方法があるが、ここでは「人づくり」をテーマに 2 つ考えたい。まず、環境ボランティアリーダーが所属する、環境市民団体が持続的に社会の中で活動し続けるために、若い世代の力を活用しながら次世代のリーダーを育てるという視点が必要であると考え。今回は FoJ という国による環境ボランティア養成の仕組みと、その実際を学んだ。これをもとにした日本版環境ボランティア養成制度実現に向けての仕組みを述べる。一つ目は、現在すでに高等教育機関等で行っているインターンシップ制度を改善していく方法である。現状のインターンシップ制度では、高等教育機関が学生の職場体験的な位置づけが強く、また学生は単位取得のためであったり、就職に向けてのボランティア活動的なとらえ方から脱することができていない。問題点としては、事前に高等教育機関と環境市民団体との十分なコミュニケーションが不足していたり、インターンシップに向けて、学生への十分なトレーニングの機会の提供できていないことがあげられる。FoJ は週 5 日の研修を年間 5 回実施しており、この研修がドイツでの人材養成制度の重要な部分であると感じた。よって日本でのこれらを解決するために、団体と高等教育機関が連携し、学生の希望とインターンシップの具体的な内容、役割のマッチング、適性判断など、十分な情報交換を行うのはもちろん、協働で社会人基礎力を養うセミナーを企画実施し、インターンシップ参加の必須条件とすることを提案する。経済産業省が唱える社会人基礎力は、社会人に求められる能力やその要素であり、具体的な指標である。どの大学でも共通の取り組みができ、地域性や受け入れ先の特性を考慮したセミナーを実施することが可能である。国はこれまでも若者の自立やニート等の問題に対して改善するように様々な取り組みを行ってきた。このような既存の取り組みを融合・再構築し、持続可能な社会づくりを目指す仕組みはど

うであろうか。社会人基礎力を養うセミナーを実施する際には、特に環境市民団体が持つ企画力や指導力、マネジメント力等のノウハウを活かせる。また多くが人材不足や人材の確保の問題を抱える環境市民団体にとって、インターシップは人材を雇用するチャンスとなる。また、高等教育機関にとっても、学生の就職率を高めることができ、新たなニートの創出を減らすことができる。以上のように、環境ボランティアリーダーが所属する環境市民団体とその他がWIN-WIN-WINの関係となりえるこうした仕組み作りを提案する。国としての制度とするには、現実的に多くのハードルがあったり、時間がかかることが一般的である。この点はロビー活動ができる中間支援組織、企業、財団などの力を期待したい。そのためにも、支援を受ける環境ボランティアリーダーが、所属する組織の魅力や透明性をしっかりと社会にPRしておくことが重要である。ここでは高等教育機関としたが、高校などの中等教育機関にも十分あてはめて考えることができる。

2つ目は、現在すでに現場で環境ボランティアリーダーとして活動している人材に対して、抱えている課題解決につながるスキルアップ等のトレーニングや学びの場を提供する視点が必要であると考え。このような取り組みは、今回のドイツでの研修をはじめ、セミナー等の形でもすでに実施されており、比較的充実していると思われるが、いくつかの問題点がある。セミナー等は主要な大都市を中心に開催されることが多く、地方都市の環境市民団体に所属するリーダーは参加しにくい。また、会場への移動方法や時間、経費を考えると、参加をしたいと思っても現実的に困難な場合がある。地域の環境市民活動を担う大部分の小さな市民団体に所属するリーダーにとって、お金と時間は大きな問題である。そこで、解決方法としてEラーニングの仕組みを作ることを提案する。Eラーニングは受講者がインターネット上で好きな時に学べる点で、時間の問題を解決できる。セミナー会場に行って聞いていた講義も、WEB上で動画で学び、受講内容は選択式の問題で習熟度合いを高める。論述や質問はWEBに直接書き込み、学びを深めたり、質疑応答を繰り返すこともできる。Eラーニングシステムの構築は簡単ではなかったが、近年では基本的なシステムに関するコードが公開されており、これを使って国内の大学でEラーニングシステムが構築されている。システム構築には費用はかかるが、企業などからの支援を受けて、市民団体の中間支援組織がこのような仕組みを作り実施すれば、全国いつでもどこでも低価格で受講できるセミナーが開催可能である。システムを可能な限りスマートフォン対応にすれば、リーダーたちはもっと気軽に学びの機会を得ることができる。Eラーニングシステムは、単にWEB上で学習の機会を提供するだけでなく、学習進捗状況の把握、課題の提示と解答、疑問に対する応答など、受講生の管理と細かい対応が可能となる。一方で、WEB上の学習は、

受講生同士のつながりが **facebook** 等のバーチャルなものとして展開されたり、システムを運用する人やお金の問題がある。お金は企業などから支援してもらえるようにし、システムの構築と運営は、中間支援組織等で積極的にお願いしたい。従来の研修スタイルでは、残念ながら特定のリーダーにしか、メリットを享受してもらえなかった。しかし、このように新しい E ラーニングの仕組みを作ることで、これらの課題を解決できる。まずは E ラーニングを充実させながら、その他の集合型セミナーに参加したり、実施することで、安協ボランティアリーダーを支援することができると思う。

以上のように、今回のドイツ研修で学んだことをもとにして「人づくり」をテーマに環境ボランティアリーダーを支援する2つの仕組みについて考えた。仕組み作りは容易ではないことはすでに述べたが、仕組みができた後の運営の困難もあることを肝に銘じ、こうした仕組みができた際に力になれるように、私の団体でも準備をしていきたい。

最後に、私の好きな紀元前中国の賢人管中の格言を紹介して終わりとします。

一年之計、莫如樹穀。十年之計、莫如樹木。終身之計、莫如樹人。一樹一穫者、穀也。一樹十穫者、木也。一樹百穫者、人也。

英語ではこうなります。

If you are thinking a year ahead, sow seed. If you are thinking 10 years ahead, plant a tree. If you are thinking 100 years ahead, educate people.

1年先のことを考えるなら、種をまきなさい。10年先のことを考えるなら、木を植えなさい。100年先のことを考えるなら、人を育てなさい。

③全体としての感想

はじめて訪問したドイツでは、期待していたとおり、行く先々でいろいろな発見や驚きがありました。帰国後に組織ですぐに取り組めること、活動に活かせることなどがたくさんありました。しかし、そうしたことだけに着目するのではなく、得られた情報や実践例の根底にある、各団体等のミッションは何か、どういうビジョンで実施しているのか、その情熱はどこから来るのか、といった本質を学び取ることを目標に設定して臨みました。

お会いした講師のみなさんは、本当に熱心に講義をしていただきました。それぞれの所属する組織の活動の説明では、ミッションに基づく活動を通じて、なぜその活動が必要なのか、どうやってやっているのかなど、今後どうして行くのか、静かで強い思いを感じることができました。質実剛健という言葉がやはりぴったりと当てはまります。そうした中で、ドイツの環境活動の背景にある、歴史、環境問題の変遷、宗教観、自然観、価値観、社会システムが実際の

活動に大きな影響を与えているという実感を得ました。「ボトムアップ」や「自由意思」という言葉が何度も出てきましたが、その都度、改めて日本の環境活動の背景にある、歴史、環境問題の変遷、宗教観、自然観、価値観、社会システム等について考えさせられました。外に出ることで内がよく見えるといいますが、まさに、ドイツを通して日本を、日本での環境活動を、そして自分の団体を内省することができました。また、環境先進国ドイツであっても、実際は様々な問題を抱えており、そうした現実的な部分に触れることができたことで、日本での取り組みの良さ、あるいは進んでいる部分がわかりました。具体的な活動や組織の在り方、マネジメントなど、すぐに活かせる部分とともに、帰国後にまずは自分の団体と地域で、次に日本の環境ボランティアリーダーを増やす部分でしっかりと還元したいと思います。

次に、共に過ごした仲間からたくさんの刺激をもらいました。課題を再認識したり、新たに発見したり、よりよくするヒントをもらったり。それぞれ活動場所や内容は異なっても、日本で同じ志を持って活動している同志の存在は、大変心強いものです。毎晩夜遅くまで議論できたことも大きな学びでした。

3つ目に、現場での実践者が多いため、森のようちえんや自然保護センター、田舎の街並みやブドウ畑等のフィールド、都市部を実際に歩いて、五感で学べたことは大きな財産です。地域の方との交流は言葉の壁を越えて、おもてなしの心や情熱をものすごく感じました。こうしたマインドの重要性を改めて学ぶことができました。

最後になりましたが、今回の研修に選んでいただいたこと、私たちに学びと成長のために労を惜しまず準備計画してくださったセブンイレブン財団のみなさま、講師の皆さん、団長の小野さん、トップツアーのみなさま、添乗の若井さん、通訳の小島さんに心よりお礼申し上げます。そしてセブンイレブンのコンビニエンスストアで募金頂いた全国の皆様にも心よりお礼申し上げます。

学んだことを自分自身で、自分の団体で、地域で実践することで、そして日本の環境ボランティアリーダーを支援するリーダー会のリーダーとして活動していくことで、還元させていただきます。

本当にありがとうございました。今後どうぞよろしく願いいたします。